

〈小学校 特別活動〉

集団の中で互いを認め合う児童の育成

～話し合い活動を生かした学級活動の工夫を通して～

沖縄市立美里小学校 教諭 伊 佐 奈 苗

I テーマ設定理由

現代は、立ち止まることができないほど、常に新しいことが押し寄せる「知識基盤社会」と言われる。あらゆる分野での目ざましい進歩は、社会生活および人々の考え方にも大きな影響を与え、その変化を見過ごすことはできない。このような社会を生き抜くためには、獲得した知識・技能を生かし、自ら考え判断し、行動する自主的・主体的な態度が求められている。

こうした中、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、育むべき「生きる力」を「資質や能力」の3視点の柱に分け、具体的指導につながる方向性を示した。「資質や能力」の3視点「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の活用」「主体的に学習する態度の育成」は相互に関わり、互いを行き来する関係によって高められ、育まれる。無藤（2016）によれば、「資質や能力」の視点は「相互につながり、循環していく過程を確保すべきである。相互に連なり、刺激し、また戻ってくる一連の過程が授業である。」とあり、実際の指導においてそれらが同時に含まれる授業スタイルがより重要となってくると考えられ、子どもたちの学びの理想として「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。

3年生の本学級の児童は、明るく素直で男女の仲もよい。困っている児童がいると互いに助け合う場面も見られる。しかし、幼さが見られる場面も多くある。ギャングエイジに差し掛かっているが、自己中心性が強く集団としての意識が弱い。学級全体でのまとまりが薄れ、仲間を認めず、相手の意見に賛同するよりも反発する姿が見られる。また、6月に実施した i-check 調査では、「友だちのささえ」「思いを伝える力」「他者からの評価」において全国肯定値や学年肯定値よりも低くなっている。周囲との関係性を意識しつつある時期に、関係構築がうまく行えていない実態がある。

日々、担任として個々に応じた声かけや取り組みを意識し行っているが、担任側からの働きかけだけでは、児童の相互理解の深まりには限界があるように感じられる。相互理解を深めるためには、児童同士の理解を深められる場を学校生活の中で意図的により多く設定する必要があると考える。

そこで、相手の考えに触れ、知り、理解し、尊重するための手立てとして特別活動「学級活動・話し合い活動」の充実を図っていききたい。話し合うということには、それを行うための何らかの理由が伴う。「〇〇したい」という解決、共有、深化、計画・実行を目指す欲求である。個人、集団双方から発生するそのような思いを話し合い活動で取り上げることにより、自他の理解に深くつながることができるのではないかと考える。中学年の話し合い活動では、子どもたちで会の運営、計画・実行を行い、それぞれの場で様々な役割を担うことで責任感を育てることができる。また、意見の交流では、異なる意見に対して折り合いをつける等、公平性に着目した決定を行うことで社会性を育て、さらに、自らの考えを進んで発信する主体性を育てることもできる。このようなねらいのもと、児童相互の理解を深め、よりよい人間関係の構築を目指したい。

本研究では、話し合い活動の基礎を国語科「A話すこと・聞くこと」で学習し、それを生かして話し合い活動に発展させるものである。学級活動や話し合い活動においては、自他の活躍や成長を実感できるような活動の展開の工夫や振り返りの方法と場の工夫を考えたいと思い、本テーマを設定した。

II 目指す児童像

集団の中で、自他の違いを認め、尊重し、よりよい友人関係を築ける児童

Ⅲ 研究目標

国語科の話し合い活動の基本を生かし、話し合い活動を中心とする学級活動を行い、意見交流や振り返りの過程で、子どもの相互理解が深まるような活動の工夫や学級会で決まった活動を計画し、実践することによって、児童の変容を自他双方で気づき共有できる工夫を探る。

Ⅳ 研究仮説

1 基本仮説

話し合い活動や学級会で決まったことを計画し、実践する活動及び、振り返りや場の工夫を行うことで、自他の活躍や成長を実感できるであろう。

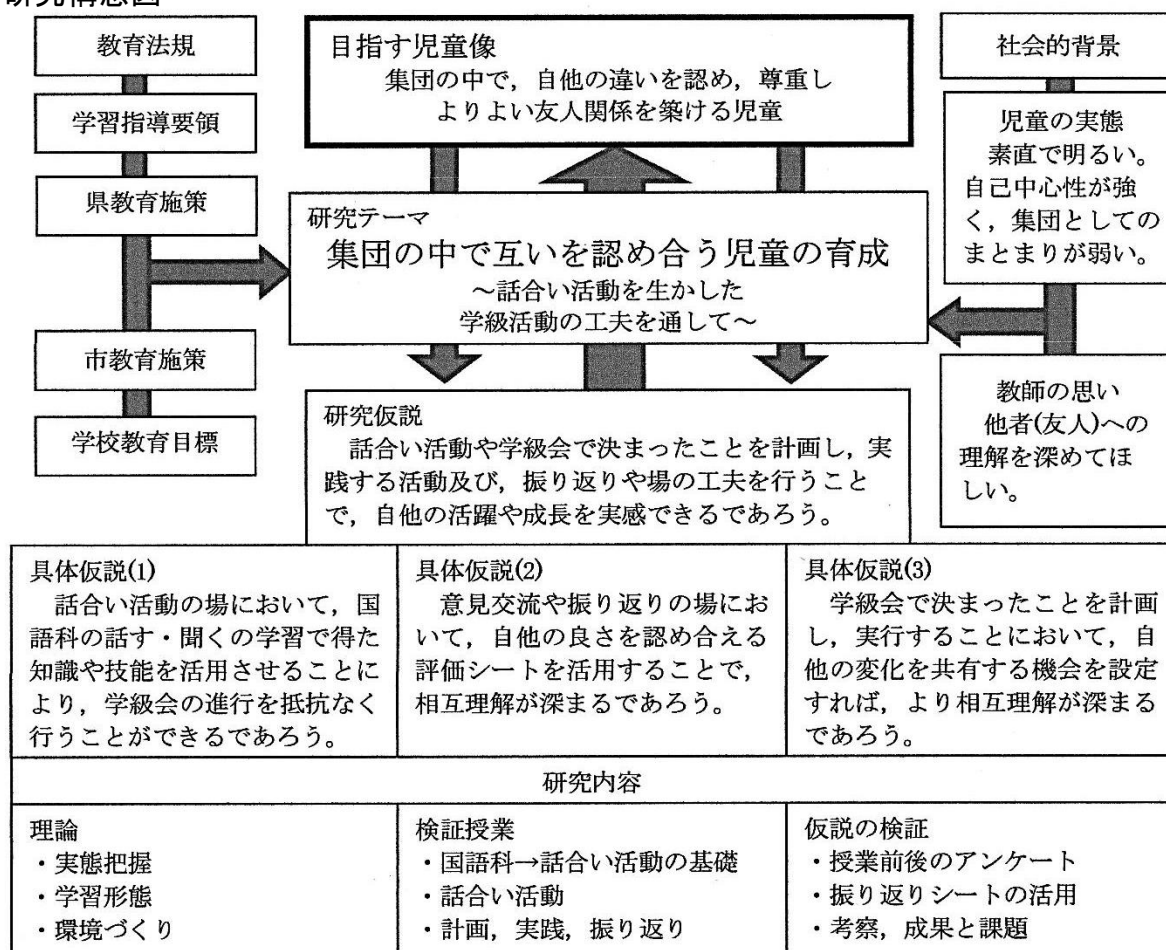
2 具体仮説

- (1) 話し合い活動の場において、国語科の話す・聞くの学習で得た知識や技能を活用させることにより、学級会の進行を抵抗なく行うことができるであろう。
- (2) 意見交流や振り返りの場において、自他の良さを認め合える評価シートを活用することで、相互理解が深まるであろう。
- (3) 学級会で決まったことの活動を計画し、実行することにおいて、自他の変化を共有する機会を設定すれば、より相互理解が深まるであろう。

3 検証計画

- (1) 事前・事後のアンケート調査及び i-check の活用
- (2) 理論および授業方法
- (3) 検証授業の実施、仮説の検証

Ⅴ 研究構想図



VI 理論研究

1 集団の捉え方

(1) 活動の基盤となる集団

特別活動の特質は、望ましい集団活動を通して、自主的に物事にに関わり、行動を起こし、体験を積むことでそこから気付くことを学び取るものである。また、各教科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間などの学習意欲を高める活動になりえることや、道徳的実践を効果的に展開できる場や機会ともなる。こうした、学びや実践の場として活動の基盤となるのが、学級集団である。同一の年齢の男女で構成され、4月から翌年の3月まで学習や生活経験を共にする集団である。年度始めの学級は、友人関係を学級内で構築しておらず、前学年のものから引き続いている状態で、学級としてのまとまりも弱い。しかし、そのような状況も、日々の生活を共にし、新しい友人関係を形成することで、所属感が高まり、まとまりのある集団へと変化する。

そこで、担任として、学級集団の発達段階の目安を持ち、よりよい集団として育てていくことが必要と考える。

(2) よい集団とは

指導要領解説には、学級活動で育てたいものの一つに「望ましい人間関係」を挙げ、「楽しく豊かな学級生活づくりのために、互いを尊重しよさを認め合えるような人間関係」としている。つまり、よい集団とは、学級の児童にとって互いを尊重できる人間関係が構築されている集団と捉えることができる。学年別で示すと、低学年では「仲良く助け合おうとする人間関係」、中学年では「協力し合おうとする人間関係」、高学年では「信頼し支え合おうとする人間関係」とある。

2 互いを尊重できる関係とは

(1) 個性とその伸長

特別活動の目標には「個性の伸長を図る」ことがあげられているが、「個性」と聞くと集団の発達を重視する学級活動からは、離れているようにも感じる。しかし、指導要領解説には「個性」と「その伸長」について以下のように示されている。

〈個性〉

自己中心的な「閉じた個」ではなく、集団から認められ、集団の中で自らのよさをよりよく発揮し、他者と協調できるような「開かれた個」

〈個性の伸長〉

集団活動を通して、多様な他者との人間的な触れ合いの中で、自他のよさや可能性に気付き、理解し、そのよさや可能性を互いに認め合い、よりよく伸ばし合うとともに、自分への自信をもち、積極的に集団活動に生かしていくこと

つまり、特別活動が目指す個性の伸長は、集団において行われ、自己の側面に限らず、自他でそのよさや可能性について認め、伸ばしていくことである。このように個性の伸長を捉えると、集団活動を行うことが、互いを認め合える関係の構築に大きく貢献すると考えられる。そこで、互いを認め合える関係を構築するには、どのような過程があるのか考える。

(2) 認め合える関係を生むには

実用日本語表現辞典によると「認め合う」とは、「互いに互いを見て認識する、または、互いを才能ある者と評価するさま」とある。人間関係での認め合いを考えるならば、互いのよさに気付き、実感することであると考え。この気付きと実感は、集団の中でどのように得られるのであろうか。そこには、自己と他者についての理解の仕方に手がかりがあると考え。

① 他者理解につながる共感

互いをよく理解し合うには、相手への働きかけをどのようにするのかといった、態度の表出が大きく関係していると考え。そこで考えられるのが「共感」である。伊藤・平林（1998）によれば、「他者の感情あるいは他者のおかれている状況を認知して、それと一致はしないまでも同じ方向の感情を共有すること」とある。こうした共感性を持ち、相手に接することは他者理解の深まりにつながると考え、ひいては、相互理解の深まりにつながると考える。次は、その共感性

をどのように示すのか考える。

② 共感の示し方

原田（2016）は、「相手の立場に立って共感する視点としてセルマンの『視点取得能力』が必要になる。」と述べており、視点取得能力とは、「自他の違いを認識し、他者の立場から他者の欲求や感情、思考や意図等を推し量り、社会的な観点で判断する能力」としている。他者に共感するにあたり、このような視点をを用いて共感性を示し、相手に合った態度を表出しているのである。

このように、共感性を持って、相手への理解を深めることで相互理解の深まり（図1）になると考えられる。相互理解が深まるということは、互いを尊重できる関係が構築されたと考える。

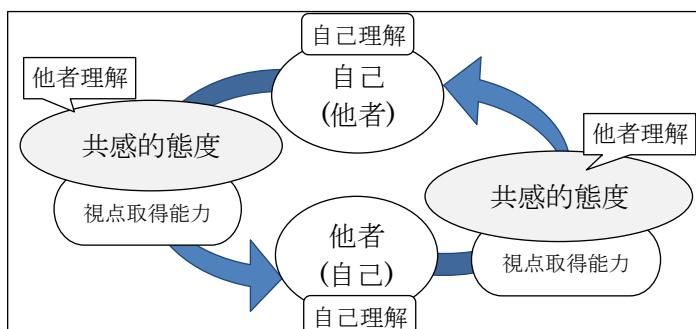


図1 相互理解

③ 自己理解について

自己理解とは、自分自身で自分についての認識を深めることであると考えられる。その中でも、「自分の『よさ』を自分で認めることができる子どもは、他人の中にも『よさ』を見つけることができ、人間関係の不安も少なくなり、生きていくことが楽しく容易になる。」（桐山 2016）とあり、自己理解を深め自身でよさを認識することは、肯定的な他者理解を行うことができ、互いを尊重する関係を築くことができると考える。また、久我（2015）は、その自己理解の深まりに大きく影響を与えるのが「保護者への信頼」（親からの愛情）であるとし、「保護者への信頼」が低い子は自己理解が進まず、自身でのがんばりや周囲への優しさなど、意識と行動をよりよく発揮することが難しいと述べている。このように「保護者への信頼」を寄せることができず、自分への信頼（自己理解の深まり）が低下してしまった場合、それを回復させるものとして、周囲からの承認をあげている。学級で考えるならば、教師やクラスメイトからの承認を受けることで、自分への信頼を回復するのである。その上で自己理解が深まれば、さらなる他者理解にもつながり、相互理解が図られると考えられる。

3 認め合いを深める活動

互いを認め合う関係の成立は、視点取得能力を合わせた共感的態度での他者理解と自身のよさを知る自己理解で成立する。このような認め合いの関係を集団の中で成立させるには、教師が意図的に設定し気付かせ実感させて行く必要があると考える。そこで次は、児童同士が、互いを認め合うことができる気づきと実感の機会と場の設定について、話し合い活動と学級活動の工夫という視点で考える。

(1) 話し合い活動を生かす意義

学級での認め合いの機会や場として、話し合い活動をその中心に捉える。話し合うということには、先述したように、様々な欲求が伴うと考える（図2）。これは、個人や集団双方から発生し、学級で考えるならば、学級を「よりよい学級（集団）」にしたい」と願う児童の思いである。つまり、「話し合いにおける出発点であり、提案理由」（杉田2014）である。このような児童の自治的な話し合いを進めることは、特別活動が目指す「人間関係形成能力の育成」＝「互いを尊重できる関係の構築」を図ることができると考え、話し合い活動を展開する。

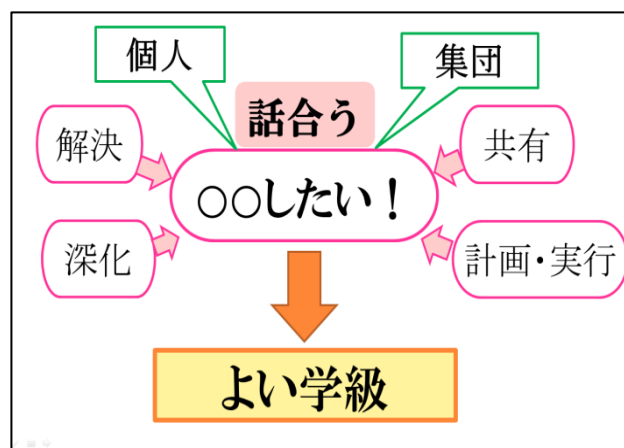


図2 話し合いの欲求

(2) 話し合い活動を支える国語との関連

話し合い活動を行う上で、話し合いのスキルは必須条件である。自分の思いや考えを発表するだけでは、話し合いにはならない。一つのテーマのもと、話し手は意見を発信し、聞き手はそれを受け取る。聞き手は、自らの考えと照らし合わせ新たな意見を生み出したり、賛同したりしながら今度は、自らの意見を発信する。そして、最終的には互いの意見から導き出された、答えをまとめるのである。

集団での話し合いとなれば、全員がその流れを把握しておく必要がある。また、話し合いを先導する司会者や記録といった役割も必要となる。

本学級の児童は、教師主導や簡単な司会を立てた話し合い経験はあるものの、児童が主体となった話し合い活動は半数が未経験である。そこで、よりよい話し合い活動を展開するために、国語科の学習を生かすことを考える。話し合いの流れを体験することで、各役割の仕事内容や仕事での大切なことを知ることができる。また、取り扱う教材が、係活動での小集団の話し合いであるため、未経験の児童にとっても抵抗感が少なく、話し合いの経験を積むことができる。と考える。

(3) 活動を支える環境づくり

特別活動は、児童の自主的・実践的な活動を期待するものである。そのため、活動への意欲づけや活動の様子を児童自身で把握しやすくするために「活動の可視化」を行う必要がある。そこで、以下の点において「活動の可視化」を行う。

① 活動への意欲づけとして

学級会を行うには、全員がその目的や内容を事前に共通理解しておくことが必要である。そこで、教室の一角に学級活動コーナーを設置し、議題、めあて、司会団といった学級会に必要な情報を掲示し意欲を高める。それに合わせ、話し合いの流れや基本姿勢なども合わせて掲示し、常に児童がそれらを意識して学級会に取り組めるようにする。

② 板書の工夫（納得と意欲づけ）

学級会では、児童の様々な意見を集め、その中からめあてに照らし合わせ、よりよい意見を選択する。意見の選択には、意見を出した児童の考えや思いを含め、共通点や相違点での選択、さらには、めあてとの合致を踏まえた選択が行われる。こうした、意見の選択過程を児童に分かりやすく示すことで、意見の合意形成が児童にとって納得したものになると考える。そこで、意見とその理由について板書する。それにより、発表者の考えを踏まえた意見の選択（折り合いのつけ方）ができるであろうと考える。また、会の進行状況を板書で示すことは、児童全員が主体的に学級会に参加できると考える。

③ 役割を意識するための工夫

今回取り組む話し合い活動は、役割に分かれ、司会の進行に沿って話合うことを行う。役割を与えられ、その責任を果たすことは、学級への所属意識の高まりにつながると考えられる。また、キャリア教育の視点において、社会性を育むことにもつながる。そこで、児童が役割を意識した活動が行えるよう、話し合い活動では、役割が分かるように札を用いる。また、小活動のバズセッションでは、司会の役割をリーダーとし、役割札を首から下げるようにする。

④ 学級会ノートの活用

活発な意見発表と安心して発表できる環境を整えることや、児童が小活動や国語での話し合い、学級会での活躍を自ら実感できるように、学級活動ノートを準備する。児童自身が活動の歩みを実感し、活動への意欲につながることを期待するものである。

⑤ 話し合いパターンの工夫

国語科で学習した話し合いの流れを基本に、2パターンで示す。1つは、共通点をもとに意見をまとめ選択する方法。もう一つは、出された意見について賛否を示す方法。議題の特質にあわせ、適切な方法を選び、話し合いを展開できるようにする。また、そのパターンについては、前述した学級活動コーナーに掲示し、意識づけを行う（図3）。

(4) 活動を工夫する際の留意点

① 発表を苦手とする児童が、学級の約半数いるため、緊張をほぐし、楽しみながら取り組める身近な話題や興味の持てるものにする。

② 活動に戸惑わないように、活動の流れや形式を示す。また、どの活動においても同じような内容で行えるように基本形を作り、関連を図る。

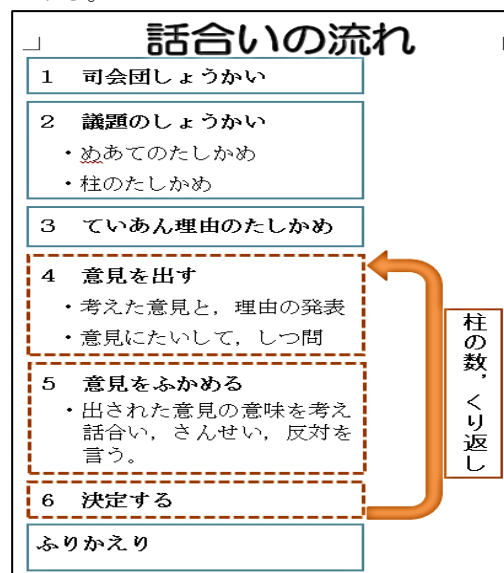


図3 パターン2

(5) 学級活動（小活動）の取り組み

① バズセッション

参加者を6人ずつにわけ、1つの議題について6分間討議する。少人数にすることで、自由な意見交流が行われ、大勢の前で発言が苦手な子どもでも抵抗感が少なく参加することができる。

実際の活動では、児童の実態に合わせ進め方を変えて行う。グループ活動として、3～4人の構成で行う。リーダー（司会）と発表者に分かれ話し合いを進める。生活グループでの活動にすることで、児童には、緊張が少なく安心感のある活動であると考ええる。また、役割をはっきりわけけることで、自分とは違う立場の視点から考えることができ、他者理解へもつながるものと考ええる。この形式での活動は、話し合い活動の振り返りにも活用する。

② ほめカード

教育実践研究家の菊池省三氏が提案する「ほめ言葉シャワー」を、カードに変えて行う。

ア 一人一担当で、割り当てられた対象のクラスメイトを一日観察する。

イ その日の終わりに、観察して見つけた対象の児童のよさやがんばりをカードに記入する。

ウ 担任が回収し、翌日配布する。

自分のよさやがんばりを見つけてもらおうと同時に、他者のよさやがんばりにも目を向け、双方からの認め合いを行うことで相互理解の深まりを期待する活動である。人間関係の構築においてもよい効果をもたらすことができると考える。

4 認め合いを促すその他の取り組み

(1) 教師の働きかけ

自己と他者が認め合える場を設定したとしても、活動経験だけにとどまる可能性も考えられる。そこで必要となるのは、児童同士を繋ぎ、認め合いを深める役割を行う存在である。その役割を担うのが教師であり、学級では担任と考える。話し合い活動であれば、積極的に児童の良い面（発表方法、発言内容、参加態度など）を褒め、周囲への周知を行うことである。つまり、見本となる児童の行動を褒め、モデルとして他児童に示すことで、そのよさを知らせ、同時に話し合いのスキルも向上させることができると考える。このように、児童の良い面をモデルにし強化することで、他児童への理解が深まるものと思われる。

(2) 他者を意識した態度の育成

話し合いを行うには、相手を意識した「話す・聞く」といった態度の形成が必要となる。他者への尊敬を示し、自他のよさを認め合う社会性の基礎として、その後の人間関係においても重要な役割を果たすと考えられるためである。そこで、話し合い活動前に態度形成表（図4）を示し、その育成を図る。内容については、国語科との関連や児童が自主的に態度形成への意欲を高めることを期待し、「良い」とする聞き方、話し方について児童の意見を取り入れ構成する。また、内容が多すぎでは児童の負担になると考えられることから、3点に絞り構成する。

聞きかた	
1	相手を見て、しぜい良く聞く。
2	最後までしっかり聞く。
3	自分と相手の意見をくらべる。 (共通点やちがいを見つける。)
話しかた	
1	相手を見て、声の出し方に 気をつける。
2	ていねいな言葉づかいで話す。
3	自分の考えについて、わけも 入れながら話す。

図4 聞き方・話し方

(3) 評価と振り返りについて

互いの認め合いを深めるために、話し合い活動やその他の活動において、自己の振り返りと気づき、他者への気づきが行えるような評価とそれらを交流する場の設定を行う。

① 学級会での自己評価

活動に対して、めあてを立て、主体的に参加することができたかなど、自らの活躍を実感できるように評価項目を設定する。役割の項目と共通の項目にわけ設定する。

評価基準		自己評価(役割)			
		発表者	司会	記録	時計・観察
集団活動や生活への 関心・意欲・態度	→	関心 意欲 態度	協力	協力	協力・話し合いへの 関心
集団の一員としての 思考・判断・実践	→	思考 判断 実践	・他と自分の意 見との比較 ・話題に沿った 発表	議題に沿っ た進行	分りや すいメモ
集団活動や生活に ついての知識・理解	→	知識 理解	・最後や途中 の振り返り ・意見のまと めや共通点 の見つけ	意見の聞 き取り ・黒板表記	参加者の頑 張りを目を向 ける。 最後や途中 の振り返り

図5 自己評価

② 学級会での他者評価

次時への意欲（めあて）や、モデリングの対象となるような他者の活躍に目を向けさせる。

③ バズセッションでの評価

自己評価を基本とし、リーダーと発表者に分け作成する。活動の感想を書かせることで、グループの考えがどのようなものであったのか、また、他者の考えがどのようなものであったのかを知ることができ、互いの理解が深まると考える。

発表者用		リーダー用	
名前：〃	名前：〃	よくできた◎□できた○□もう少し△	
よくできた◎□できた○□もう少し△	1相手に聞こえる声で話せた。〃	2ていねいな言葉づかいができた。〃	
1相手に聞こえる声で話せた。〃	2ていねいな言葉づかいができた。〃	3さいごまで聞くことができた。〃	
2ていねいな言葉づかいができた。〃	3さいごまで聞くことができた。〃	4話合いをスムーズに進められた。〃	
3さいごまで聞くことができた。〃	話し合いのまとめ		
何か一言（感想、アイディア、気づいたこと）		リーダーをやってみてどうでしたか。〃	

図6 バズセッションのシート

④ ふり回り

話合い活動やその他の活動において、自己、他者の活躍を周囲に広め、認めてもらうために、小集団から全体での2段階で振り返りを設定する。

VII 研究実践

1 国語の実践

(1) 単元名「話合って、みんなの考えをまとめよう」 8時間

(2) 教材名「係の活動について考えよう」

(3) めあて

① 司会や記録などの役割を決めて、クラスのことについてすすんで話し合う。

② 議題に沿って意見を出し、友達との意見の違いや共通点に気を付けながら、意見の選択をする。

③ 場に合った言葉遣いを意識する。

(4) 計画

月日	内 容	評 価
11／1 第1時	学習の見通しをもつ ・役割を知る。 ・気になる役割について、一言書く。	役割に注目しているか。 ノート（関）
11／4 第2時	役割演技をする ・6人編成のグループを組む。（司会1人、記録1人、提案者4人） ・教科書の例文に沿って、ロールプレイを行う。 ・気付いたことをノートにまとめる。	会にあった言葉づかいを意識しているか。 観察（表）
11／7 第3時	役割で大切なことをまとめる ・各役でグループを組む（司会1人、記録1人、提案者4人） ・ロールプレイで感じたことをグループでまとめる。	役割の仕事を理解しているか。ノート（知）
11／8 第4時	役割でまとめた意見を全体でまとめる ・司会、記録、提案者それぞれで、大切だと思う点を板書にまとめる。	
11／9 第5時	クラスの話合いに向けて準備 ・クラスでアンケートを取る。 ・アンケートからグループで話し合うことを選ぶ。→ <u>議題の選定</u> ・めあてを決める。	

11/10 第6時	係での話し合い ・役割をきめる。 ・マニュアルを読み合わせ，シートの書き込みを行う。	進行に沿って意見を出しているか。 観察（技）
第7時	係での話し合い ・話し合いを行う。 ・決まったことをまとめる。 ・実行することを詳しく決める。 ・話し合いの反省（各自）	意見の違いに気付いているか。 観察（技）
11/11 第8時	全体でのまとめ ・各係より話し合いの結果（決定）を報告 ・質問，感想発表	話し合ったことを報告しているか。観察（技）

係の活動について考えよう メンバー（ 1 ロールプレイをして、気づいたことをまとめてみましょう。（一人二つ意見を 別〇書くのに時間がかかった。（ひなた）	すし時間がかかった。 すししてきながら、たことかあったのでおもしろい。 すしするときはよかった。 も、と声を出せばよかった。 すしあんがでなかった。 ちんとしていあんができた。 おおきな声を出す。 発表があると思います。	役にかりえること もう早く時間が来たようにする。↓記号は、司会など 大きな声が表れます	2 出てきた意見をまとめてみましょう。	11月1日	役割：○
--	---	--	----------------------------	--------------	-------------

上記のそれぞれの役割から出てきた大切なことは、今後の学級会にも生かされることであるため、全体でまとめプリントし、学級会ノートに貼り付けた。

児童の実態から、学級会を行う前段階として、少人数による話し合い活動を取り入れた。自由な雰囲気緊張せず取り組めるように、話題は、日常生活から選定した。また、進行を迷わずできるように進め方も提示した。リーダー（司会）、発表者の役割を順に経験させ、役割の仕事や大切さを実感できるようにした。さらに、同じ役割に偏ることなく、公平に経験することで、他者理解の一つになるとも考えられる。

進行に沿って話合う形式や話合いの雰囲気
に慣れる。

- ① 週1回の朝の時間か午後の時間に活動する。
- ② グループで活動する。
- ③ リーダー(司会)と発表者に分かれる。
- ④ 活動最後は、リーダーによるグループの意見の発表を行い、活動の振り返りを行う。

- ①これから、バズセッションをはじめます。
今日の議題は「 」です。
- ②意見の後に、理由も話してください。
- ③〇〇さんから、どうぞ。
- ④つぎは、△△さんどうぞ。
- ⑤つぎは、□□さんどうぞ。
- ⑥もっと、くわしく聞いてみたいことは、ありますか。
〇〇さんどうぞ。△△さんどうぞ。□□さんどうぞ。
- ⑦ほかに、ありますか。
- ⑧今日のまとめです。
みなさんの考えは、「 」と言うことですね。
今日は「 ※感想を一言 」です。（でした。）
- ⑨これで、バズセッションをおわります。

Ⅷ 公開検証授業

学級活動学習指導案

平成 28 年 12 月 9 日（金）2 校時
3 年 3 組 男子 18 名 女子 14 名 計 32 名
授業者 伊佐 奈苗

1 議題 「感謝の気持ちを伝えよう」

2 議題について

(1) 児童の実態

本学級の児童は、明るく素直で、授業の中でも活発に意見を発表する場面が多くみられる。しかし、他者の発言に対し、肯定的に受け止め考えを深めるというよりも、批判的な発言で返答してしまう場面が見られる。またアンケートでは、人前での発表に対して、好きな児童、好きではない児童の 2 つに分かれる実態がある。さらに「自分の考えを周りの人に知ってもらいたいのか」の質問に対しても、学級を二分する結果となった。その理由として、「恥ずかしい、間違えたくない」といったことが挙げられた。活発に発表しているようにみられるが、児童の心の内は、発表に対してあまり前向きな印象を持っていないことが分かる。だが、自分の考えや思いが伝わったときの感想を尋ねると「とてもうれしい、すっきりする、よかった」というような回答があり、発表に対して消極的ではあるが、行動を実行できたときには、達成感や充実感を得ていることがわかる。このことから、発表の前段階として、児童の不安解消を図る手だてや雰囲気づくりを行うことが、重要と考える。

児童はこれまで、「学級目標を決める」「お楽しみ会のプログラムを決める」といった学級会を経験しているが、司会、記録、提案といった役割を立てて、司会の進行に沿って行うものは未経験であった。その後、国語科の話す・聞く「係活動について考えよう」で、役割を立て司会の進行に沿って話し合う学習を行い、その経験を生かし学級会を行った。

(2) 議題設定の理由

議題の選出は、児童にアンケートを実施して意見を集め、その中から児童と相談の上決定した。議題の選出方法として、始め児童に戸惑いが見られたため、5 つから 6 つの議題例を示し、選択と自由記述の 2 つの方法を取り入れ回答を集めた。

本校では毎年、児童会主催の勤労感謝集会が行われている。学校生活でお世話になっている方々を招いて感謝の気持ちを伝える集会である。後日、集会について児童に尋ねたところ「誰が来ていたかわからない。」という声が聞かれた。日常生活でお世話になっている人については、「両親、祖父母」という声が上がるのに対し、学校生活については、どのような人が関わり、手助けしてもらっているかわからない状態である。そこで、アンケートの結果と合わせ、学校生活でお世話になっている人へ、学級として感謝の気持ちを示すことを議題として設定し、その対象と方法を会議で決定していきたい。

今回の学級会では、意見に対し賛成・反対のみで選ぶのではなく、出された意見とその理由を考え、よりよい方を選択できるように話し合いを進めていきたい。

決定事項については、グループを形成し児童が自主的に活動(準備)を行えるようにしていきたい。

3 本研究とのかかわり

本研究は「集団の中で、自他の違いを認め、尊重し、よりよい友人関係を築ける児童」を目指し、「集団の中で互いを認め合う児童の育成」をテーマに「話し合い活動を生かした学級活動の工夫」を進めている。今回の授業では、具体仮説(2)の「意見交流や振り返りの場において、自他の良さを認め合える評価シートを活用することで、相互理解が深まるであろう。」の検証を行う。

話し合いを行う過程で児童それぞれの考えや思いに触れることで、児童相互の理解につながるのではないかと考える。

相互理解の深まりの過程として、まず自己を見つめることが重要となってくる。自分のよさに気付いている自己肯定感が高い人は、他者のよさを認め、互いの人間関係を肯定的に構築できる。そこで、自己のよさに気づき、それを実感できるようにするため、活動の評価シートを自己評価に重点を置き

て作成した。また、それぞれの役割に合わせ評価項目を設定した。さらに、どの役割においても意識してほしい項目に関しては、共通の項目として示した。話し合い活動の中で、自己のよさを実感することができるのであれば、他者理解への気付きにもつながるものとする。

他者理解への一歩として、9月から「友達のよさ発見カード」の活動に取り組んでいる。無作為に一人一担当で観察する対象児童を指定し、活動の中で見られたその人のがんばりやよさをカードに記録、翌朝配布する活動である。アンケートでは、自分のよさが書かれたカードを受け取ることに、65%の子どもたちが嬉しさを感じている。また、「友達のよさを見つけることができた」とする児童は71%おり、自分のよさを周囲から認められることは、他者のよさを認めることにもつながっていることがわかる。

以上のことから、自分自身でよさに気付き、さらに他者のよさにも気付くことで、互いで認め合えるといった相互理解が図られると考える。

4 第3学年及び第4学年の評価規準

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
学級の生活上の問題に関心をもち、他の児童と協力して意欲的に集団活動に取り組もうとしている。	楽しい学級生活をつくるために話し合い、自己の役割や集団としてのよりよい方法などについて考え、判断し、協力し合って実践している。	みんなで楽しい学級生活をつくることの大切さや、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の計画的な進め方などについて理解している。

5 事前の活動

1	11月1日～11日	国語話し合い活動（8時間）	
2	11月14日	アンケート（どんな話し合いをしたいか）	
3	11月22日	プレ話し合い活動	
4	11月30日 昼休み	計画委員会 ○議題の確認 ○めあての設定 ○提案理由の確認 ◎ <u>柱を立てる。</u> ◎事前の検討（場所、日時など）	評価 話し合いに意欲的に参加している。（観察）
5	12月1日 朝の会	議題のお知らせ ○議題のお知らせ（議題、めあて、柱） ○司会団のお知らせ	
6	12月6日 6校時	話し合いの準備（グループ） めあてを意識（感謝を示すとは） ○意見の準備（シートへの書き込み） 司会団準備 ○計画案の確認（流れを司会団で確かめる）	学級会への準備に意欲的に取り組んでいる。（ノートの準備）

6 本時の指導

(1) 議題 「感謝の気持ちを伝えよう」

(2) 本時のねらい

学校生活でお世話になっている人に、感謝の気持ちを伝える方法を、考えることができるようにする。

(3) 授業仮説

意見を深める場において、提案理由や発表理由に着目させることにより、相手や自分の考えを深く受け止め、よりよい意見の選択ができるであろう。

(4) 本時の展開

議題		「感謝の気持ちを伝えよう」				
提案理由		美里っ子発表会でつけたコサージュは、PTAボランティアの人に作ってもらいました。このように私たちは、学校生活でPTAの方や校長先生、保健室の先生、図書館の先生など、たくさんの人にお世話になっているので、感謝したいです。感謝でクラスみんなが笑顔になるし、伝えられた方もうれしくて笑顔になると思うので、提案します。				
めあて		感謝の気持ちを考えて、意見を出す。				
流れ	学習活動	役割	想定		評価	
			課題	教師の働きかけ 目指す児童像		
出し合う	1 司会団の紹介 2 議題、めあて、柱の確かめ ④大きな声ではっきり伝える。 ④きちんと協力する。 3 提案理由 ・提案者発表 4 教師の話 ・個人のめあてを意識させる。 柱①【感謝を伝える人】8人 5 意見を出させる。 ・なぜ、その人を選ぶのか注目する。 (板書：理由の記述) ④司会と一緒に協力する。 ④きれいな字を書く。 ④遅すぎず、早すぎず、いいペースで、記録の事を考えながら進める。 6 意見を深める。 ・理由やめあてを意識して、賛否を示す。 7 決定する。 ・学級意思の確認	司 司 提 司・発	▼意見の表出に時間がかかる。 ▼否定的な言葉の使用 ▼意見が出ない。 ▼声が聞き取り辛い。 △モデリング ▼話題からそれている。 ▼意見の分かれ ▼決定に納得していない。	○前回の学級会の反省を生かす。 ・意見表出時間の短縮を目指す。 ・否定的言葉の注意 ○ノートの記述箇所を確認させる。 ○ノートの活用を促す。 ・意見と理由 ・意見の述べ方 ○再度発表を促す。 ○良い発表者を見本としてモデルを強化 ○提案理由やめあてに振り返らせる。 ○折り合いをつける。 ・めあてに返る。 ○納得しない理由を問う。 ○折り合い、共存の関係に注目させる。	◎時間を意識し、発言 ◎肯定的な言葉の使用 ◎自分の考えた意見と理由を発表している。 ◎分からないことを進んで質問している。 ◎めあてや発表の仕方にあった発表をしている。 ◎話題に合った進行になっている。 ◎めあてにそって、よりよい意見の選択や創造を行っている。 ◎同じ意見だが、理由の違いを明確にしている。	☆めあてや提案理由にそって感謝の気持ちについて考え、意見を選ぶことができたか。(思) ◎発表・観察
	柱②【感謝を伝える方法】 8 意見を出させる。 ・意見と理由は、キーワードをメモ (板書、ノート) ④みんな一人ひとり発表させる。 9 意見を深める。 ・伝える人とその理由にあった意見を意識する。 ・事前決定事項に合うか考えて選ぶ。 (準備：1週間) (実行：1日間) 10 決定する。 ・学級意思の確認 ④みんなでちゃんと決める。 11 決まったことを知らせる。 ・司会、記録 12 振り返り ・シートへの書き込み ・感想発表		▼同じ意見を繰り返し発表する。 △モデリング ▼自分の意見を押し通す。	○理由に違いがあるか注目させる。 ○良い発表者を見本としてモデルを強化 ○提案理由やめあてに振り返らせる。 ○決定したことを実行に移す意欲づけを行う。 ○前回と比べてよかったところを振り返る。	◎めあてや発表の仕方にあった発表をしている。 ◎話題に合った進行になっている。 ◎めあてにそって、よりよい意見の選択や創造を行っている。 ◎同じ意見だが、理由の違いを明確にしている。 ◎折り合いをつける。 ◎決定したことにな納得し次への意欲をもっている。	

(5) 評価

感謝を伝えたい人を選び、感謝を伝える方法を決めることができたか。

7 自己評価の項目(話し合い活動)

	集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
評価 基準	司会や記録, 提案, 時計といった役割を知り, 意欲的に学級会に参加しようとしている。	話題が議題やめあてからそれないように考えることができる。	役割の仕事を理解し, 学級会を進めることができる。
全体	自分のめあてを達成できた。	分からないことを質問することができた。	- はっきりとした声で, 発表(発言)できた。 - 丁寧な言葉づかいができた。
発表者		- 他の意見と自分の意見を比べて考えることができた。 - 話しがそれないように, 発表することができた。	
司会	協力してがんばれた。	話がそれた時に, もとに戻せた。	- 最後や途中で, 振り返ることができた。 - 出た意見をまとめたり, 共通点を見つけた。
記録	協力してがんばれた。	分かりやすくメモすることができた。(ノート記録)	- 提案者の意見を聞くことができた。 - 提案者の意見を短く書くことができた。(ホワイトボード)
時計 観察	- 協力してがんばれた。 - 意見について一緒に考えることができた。	がんばっている人を見つけることができた。	最後や途中で, 振り返ることができた。

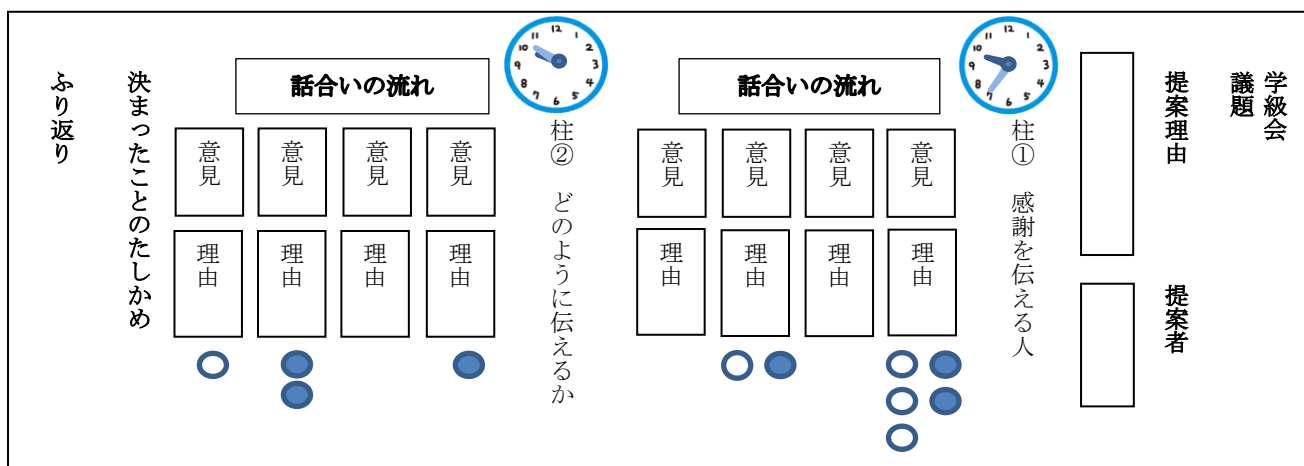
8 他者評価(話し合い活動)

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
司会や記録, 提案, 時計といった役割を知り, 意欲的に学級会に参加しようとしている。	話題が議題やめあてからそれないように考えることができる。	役割の仕事を理解し, 学級会を進めることができる。
- 話し合い活動で友人(他者)のがんばりや活躍を自由記述する。 - 次回の活動でモデルにしたい児童の行動について記述させる。		

9 事後の活動

		本時(学級会)の振り返り, 決定事項の確認 ・グループ, 全体で振り返る。 ・アンケート	評価
1	12月12日		・学級会を振り返ることができている。(観察)
2	12月12日～ 12月16日	グループ活動 (例) プレゼントづくり	・準備に意欲的に取り組んでいる。 (観察)
3	12月21日	決定事項の実施	・感謝の気持ちで実行できている。 (観察)
4	12月22日	事後活動の振り返り ・活動前, 活動後の意識の変化を振り返る。 ・次回への意欲を持つ。	・振り返りシートに活動の感想を書いている。 (シート)

10 板書計画



11 公開検証授業の様子

① 導入

- ア 司会団紹介
- イ 議題，めあて，柱の確かめ
- ウ 提案理由

「これから，学級会をはじめます。」



写真 1

「学校生活でお世話になっているたくさんの人に感謝したいです。」



写真 2

② 展開前段

柱 1 「感謝を伝える人」



写真 3

「感謝を伝えたい人は，校長先生です。いつも見守ってくれるからです。」



写真 4

③ 展開中段

意見に対して賛成，反対の表出



写真 5

「先生方に，反対を言うと失礼になると思う」と疑問に感じたことを素直に話せた。



写真 6

意見への賛否を反対ではなく，賛成のみにする確認



写真 7

そこで，柱 1 の意見に対しては，賛成のみの表出になった。

柱2「伝える方法」

「手紙がいいと思います。
その方が伝わるかな。」



写真 8



写真 9

④ 展開後段（別時間） 学級会の振り返り

グループで振り返り「がんばったことは？」



写真 10



写真 11



写真 12

全体で振り返り
自分のがんばったこと、友達のがんばっ
ていたことを発表

12 考察

(1) 成果

- ① 前回の学級会に比べ、会の進行に慣れ活発に意見の発表が行われていた。
- ② 会の中で、疑問に感じるところを素直に質問できたことは、児童が安心して会に参加できたからだと考えられる(所属意識)。
- ③ 教師は、マニュアルに沿って進行する事のみにとらわれていたが、児童は会の内容に着目し、マニュアルが合わないことを自ら実感していた(賛否の表出について)。児童が主体的に学級会に参加できていたと考える。
- ④ 感想では、「〇〇さんが良かった。」というように、他者の行動に関心を示すことができた(他者理解)。

(2) 課題

- ① 意見発表は活発だが、他の意見を取り入れたり、共通点を見つけたりすることは行われず、準備したことや思いついたことの発表にとどまっている。
- ② 話し合うことの重点を見直す必要がある。
- ③ 議題の特質を考え、意見を必ずしも絞る必要がない場合もある(柔軟に対応すべき)。

IX 仮説の検証

本研究では、国語科の話合い活動の基本を生かした、学級活動の工夫を行うことで、子どもの相互理解が深まったのかを、アンケート調査(本学級児童対象、事前10月、事後12月・2月)、授業観察や評価シート(自己、他者)、i-check調査結果をもとに、児童の変容を通して検証を行う。

※i-check調査は、沖縄市教育員会が年2回実施する質問紙調査(東京書籍)である。

1 具体仮説(1)の検証

話合い活動の場において、国語科の話す・聞くの学習で得た知識や技能を活用させることにより、学級会の進行を抵抗なく行うことができるであろう。

(1) 国語科の学習を活用

国語科「話し合って、みんなの考えをまとめよう」8時間の授業を実施し、その後の学級会への活用を行った。

① 活用の知識・技能と活用の工夫

- ア 司会の進行に沿った話合い→進行マニュアル、話合いのパターンの作成
- イ 役割の分担→役割札の作成
- ウ 意見の合意形成→学級会ノートに意見と理由の事前準備
- エ 言葉遣い→話し方の態度形成

(2) 児童の意識調査より

事後アンケート「学級会に国語の学習は、役に立ったか。」では、94%（図9）の児童がとても役立った、役立ったと回答している。その理由には、「国語の勉強と学級会が似ていたから」「本番（学級会）に丁寧な言葉づかいができたから」「前もって意見を準備することが分かったから」というような、国語の学習がその後の学級会に生かされたことがわかる。また、国語の次に学級会というような順を追って学習できたことで、自分に良かったと思う点についての質問に関しては、「発表の仕方がわかっていたので、時間が無駄にならなかった。」「みんなが良い意見を出しやすかったと思う。」とあり、国語で事前に話合いの仕方を学習したことで、学級会の流れがつかみやすく、抵抗なく学級会が進められたと考えられる。

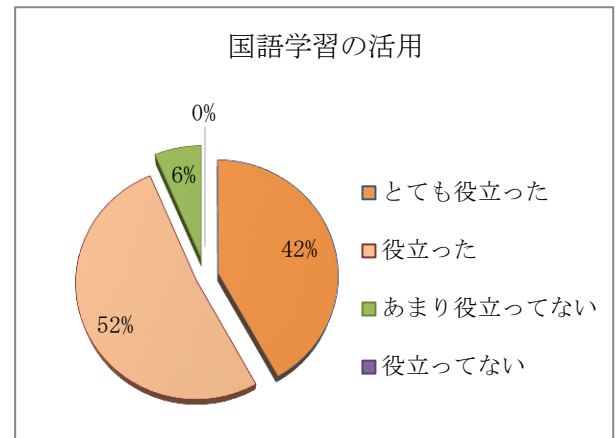


図9 アンケート

「あまり役立っていない」と回答した6%児童の理由としては、話合いのスキルの習得に国語が有効であったというよりも、「係活動の話合いをしたにも関わらず、活動が充実していない」といった教材の内容面に関する視点での回答や自分自身の一部スキルに限って判断したことで、このような回答になっている。今後、アンケート回答については、児童が十分に質問を理解し回答できるように配慮し、児童の意見を適切に拾い上げるように努めたい。

(3) 学級会ノートの比較より

学級会ノート（自己評価シート）より、国語の学習と学級会での技能面においての自己評価の高まりを比較する。図10は、発表者（提案者）の「発表の仕方」「意見の比較」「言葉づかい」「質問」「話題に沿う」の5項目の評価で「よくできた」「できた」と評価した児童の割合を表している。「意見の比較」「言葉づかい」「質問」の項目においては、国語の学習、学級会1回目、2回目と自己評価の高まりが見られることから、国語の学習が学級会に生かされたと考えられる。「話題に沿う」においては、1回目の学級会では、国語の学習時よりも高まりが見られたが、2回目には低くなっている。これには、学級会の深まりが影響していると考えられる。2回目は、会の途中で、これまでのパターンでの進行では、合わない判断したため、1回目とは違った進行を行った。それにより、児童が準備していた意見の出し方で良いのかと判断に迷ったと考えられる。また、「発表の仕方」は声の出し方についての評価であるが、国語の学習時が一番高い評価となっている。これは、学習形態の影響であると考えられる。国語では、小集団での話合いであったため、声の出し方への評価が高かったと考えられる。

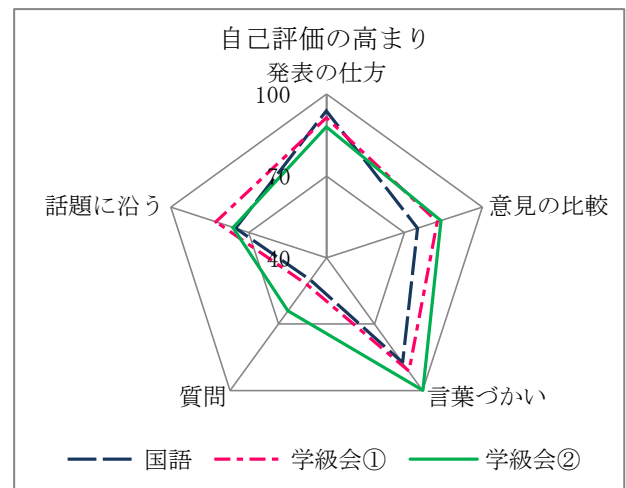


図10 できたと評価した児童の割合

「質問」項目では、自己評価の高まりは見られるが、その他の項目よりも低い値となっている。この項目は、「分からないことを質問することができた」とすることを評価するものであり、そのため、「分からないこと」が生じなければ行動自体、実行されることがなかったと考える。そこで、他の項目よりも低い値を示していると考えられる。

(4) 授業の様子より

司会、記録の役割については、少人数であることと重なりのある児童がいないため、自己評価のみの比較考察が難しい。そこで、授業での様子や感想を含め考察する。時計・観察の役割については、国語での設定はなかったため、検証には加えないこととする。

① 司会

司会は3つの話し合い活動で、それぞれ違う児童が担当した。どの話し合いでも多少の戸惑いはみられたが、司会の役割を十分に果たすことができていたと考える。これには、国語の学習で話し合いのロールプレイを行ったことで、話し合いの進行の様子が理解できていたことや、進行マニュアルを使用することで果たせたのではないかと考える。

以下の表は、学級会2回分の司会を行った児童の自己評価シートをまとめたものである。3は良くできた、2はできた、1はもう少しを表している。4児童とも評価表から見ると司会の仕事をしっかり行えたと考えられる。D児については、もう少しと評価したところが3項目あるが、話し合いのなかで、その行動の必要性がなく、実行していないと判断したのではないかと考える。実際、他の役割でも、同様のことがみられた。児童から「必要性を感じる場面がなかったので行動を実行していない」とあった。

表1 自己評価の様子(司会)

学級会		はっきり声	もどす	ふり返り	ていねい	意見のまとめ	協力	めあて	
学級会 1回目	A児	3	3	3	3	3	3	3	
	B児	3	3	3	3	3	3	3	
学級会 2回目	C児	2	3	3	2	3	3	3	3
	D児	2	1	1	3	2	3	2	1

② 記録

記録は、国語では各係に置いたため、9人となっている。学級会では、1回目、2回目とも3人ずつ置き、黒板、ノートで仕事内容を分担し取り組ませた。

国語の学習、学級会で「よくできた」「できた」と評価した児童の数(表2)を見ると、ほとんどの児童ができたと評価している。そのうち、重なりのある児童Eの変容を見る。

E児(表3)は、国語の学習の評価よりも学級会で高まりが見られる。学級会での個人のめあては、「すばやくきれいな字で書く」と設定し、めあては「達成できた」と評価している。国語での経験が次への意欲につながり、自らの目標を達成できたことが分かる。その他の児童においても「できた」と評価する児童が多いことから、記録の役割においても国語の学習がその後の学級会に生かされたと考えられる。

表2 できたと評価した子の人数(記録)

	意見聞く	短く書く	分かりやすく
国語	8/9 人	7/9 人	8/9 人
学級会①	3/3 人	2/3 人	3/3 人
学級会②	3/3 人	2/2 人	1/1 人

表3 自己評価(E児)

	意見聞く	短く書く	分かりやすく
国語	2	1	2
学級会①	2	2	3

(5) i-check 調査結果より

話し合いの基礎・基本の活用に関係のある、2項目の結果を用いて考察する。「思いを伝える力」は、カテゴリーでの肯定値で示し、「発表意欲」については、カテゴリー内の質問であるため、肯定率で示す。肯定値は、質問対象に各選択肢の配点(4段階)で括り別に算出した平均値に25を掛けたもので最大値は100である。肯定率は、対象質問に対しての肯定の割合を表すものである。「思いを伝える力」(図11)では、6月より12月に肯定値の高まりが見られる。

事前のアンケートでは、発表に関して、日頃の活発な姿と違い、消極的な結果であった(好き、嫌いで学級を2分)。しかし、国語での学習で、自分の考えや意見について事前に準備することや、

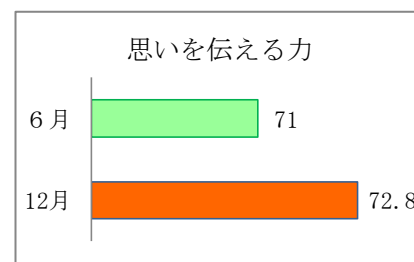


図11 肯定値の比較

会の進行について学び、それらを学級会で実践できたことにより、児童の自信となり、肯定値の高まりにつながったのではないかと考える。また、発表意欲を問う質問でも、6月と12月を比較すると、肯定率（図12）の高まりが見られる。このことから学習したことが実践へとつながり自信となったことがわかる。だが、発表意欲の肯定率が学級の50%未満であることを見ると、意欲の向上を図るには、さらなる手立ての工夫が必要であると考えられる。

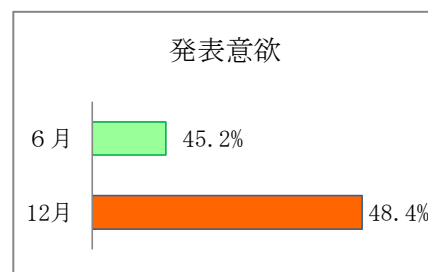


図12 肯定率の比較

以上の考察より、国語科の学習の活用は、学級会の進行に有効な手立てであったと考えられる。

2 具体仮説(2)の検証

意見交流や振り返りの場において、自他の良さを認め合える評価シートを活用することで、相互理解が深まるであろう。

具体仮説(2)では、バズセッションでの自己評価シートや国語、学級会での自己・他者評価シートに加え、児童の振り返りの場面での発言やi-check 調査結果、アンケート調査を用いて検証を行う。

(1) バズセッションの評価シートより

発表者の自己評価の「声の大きさ」「言葉づかい」「聞き方」の3項目について、活動の前、中、後にあたる3日間を抽出し、評価の高まりを比較する。

図13は、「相手に聞こえる声で話せた」についてである。活動始めの時期に比べ、後半は「良くできた」「できた」とする児童は合わせて96%となっており評価の高まりが見られる。「もう少し」と評価した児童についても前半12%であったが4%となっている。

「言葉づかい」（図14）についても日を追うごとに自己評価の高まりが見られる。前半は、「よくできた」「できた」と評価した児童は、合わせて87%であったが、後半には91%となっている。

「聞き方」（図15）については、「もう少し」と評価した児童が後半には、0%となっており、回を重ねるごとに「最後まで聞くことができた」と自身で実感できたことがわかる。

「声の大きさ」についての項目で途中の評価の落ち込みは、自分への厳しさから低い評価になったのではないかと考える。その後は、「できた」の評価が続き、自己の能力をより肯定的に捉えるようになったと考えられる。

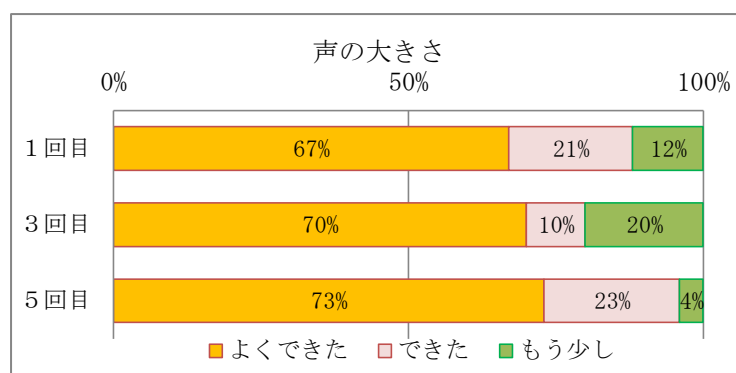


図13 バズセッション自己評価

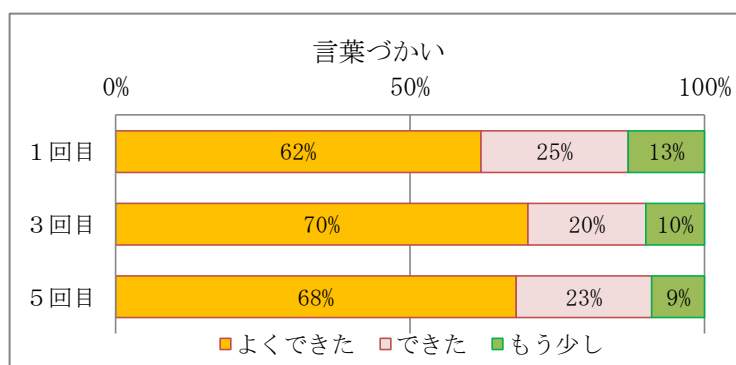


図14 バズセッション自己評価

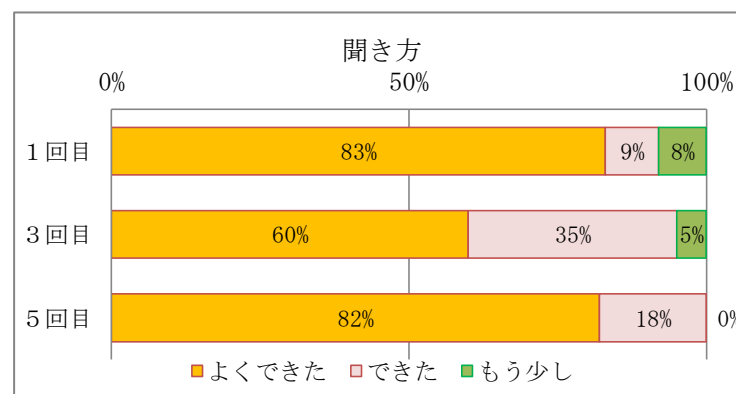


図15 バズセッション自己評価

(2) 学級会の評価シートと授業の様子より

自己評価については、仮説(1)の検証で示したように評価の高まりが見られることが分かる。ここでは、他者評価の変容について、評価シートと授業の様子を合わせ検証する。

学級会1回目の他者評価(図16)については、一言で、「〇〇をがんばっていた。」「みんながんばっていた。」という記述や自己評価のみの記述であったが、2回目の他者評価では、個人名と具体的な行動を挙げて評価(図17)する児童が増えた。これ

はっちゃんをがんばっていた。
た

図16 学級会1回目

さくらの	さんと	さんが、みんなにおいつこうとい
しょうけんめいがんばっていた。		
さんが、いっぱい発表をしていた。		

図17 学級会2回目

には、モデルにしたい友だちの行動(図18)を見つけることも加えたことで、より他者評価が高まったと考えられる。

授業後段での振り返りの場面では、10人の児童が「〇〇さんが、発表をがんばっていた。」というような他者を認める発表をすることができた。その中には、「前の学級会よりも、発表できていた。」というように、前回と比較し友達の成長を認める内容も見られた。

次の学級会でまねしてみたい人()さん
どんなこと: 分からないことを、しつ問すること。

図18 モデリング

(3) i-check 調査結果より

シート活用の効果に係る2項目についての結果を用いる。「友達の支え」「成功体験と自信」(図19)の両者とも、6月よりも12月が高まっていることがわかる。「友達の支え」の向上には、学級活動での活躍を他者から認められたことで高まったと考えられる。

「成功体験と自信」については、同様に学級活動においての自己の活躍や成長を自ら実感できたことで高まったと考えられる。

以上の考察より、評価シートの活用は、自他の良さを実感し認め合うことにおいて有効であり、自他の理解を深められたことは、相互理解につながったと考えられる。

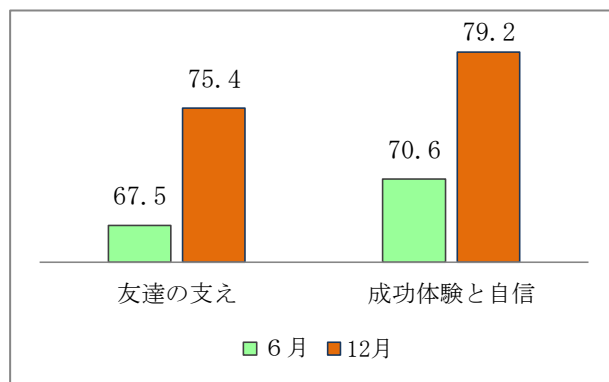


図19 肯定値の比較

3 具体仮説(3)の検証

学級会で決まったことの活動を計画し、実行することにおいて、自他の変化を共有する機会を設定すれば、より相互理解が深まるであろう。

自他の活躍や変化の共有は、小集団で行うことで互いに把握しやすくなると考え、グループ活動を取り入れた。また、活動後には、振り返りを行い、自他の変化の実感をさらに高めることにした。仮説(3)については、アンケート、i-check 調査結果より検証を行う。

(1) 児童の意識調査より

学級会で決まったことの活動(感謝の気持ちを伝える活動)を通して、自他の変化や、気付いたことなどの感想(アンケート)をまとめると以下の4点に分かれる。

表4 活動後アンケート

協力	・プレゼントを作るときにみんなと一緒に協力したからよかった。 ・少し大変だったけど、友達とできたから楽しかった。
他者評価	・〇〇さんがアイデアを思いついていたので、準備が早くなった。 ・〇〇さんが渡すプレゼントをきれいに仕上げていた。 ・勇気を出した友達がすごいと思いました。 ・友達は、プレゼント作りをがんばっていた。 ・友達が折り紙で花をいっぱい作ってがんばっていた。 ・友達のがんばっているところがたくさん見れたからよかったです。 ・みんなが真剣に作っていたところがいいなと思った。
集団の深まり	・クラスの絆が深まり、チームワークも広がった。 ・グループみんなで活動して、グループのみんなが仲がよくなったと思った。 ・グループがもっと楽しくなった。 ・プレゼントを渡すときに、恥ずかしかったが、みんなが勇気をくれて大きな声で渡せた。 ・友だち関係が深まった。 ・みんな笑顔になりました。
その他	・先生方に喜んでもらえてうれしかった。 ・普段あまり話さない先生と話せてうれしかった。

この感想から、グループでの活動（感謝を伝える活動）を通して児童は、周囲との関係性において大きな気付きや学びがあったことが分かる。活動では、手紙文の書き方、折り紙のおり方など、グループ内で互いにアイデアを出し合い、協力しながら贈り物を仕上げている姿が見られた。

活動後の振り返りは、自己と他者のがんばりについで視点で、気付いたことや感想を中心にグループで行い、その後全体で発表を行った。こうした、活動の振り返りの場を設けたことについて複数回答で児童に意見を求めたところ、表5に示す回答が得られた。振り返りの場を設けることは、自己のがんばりや他者のがんばりを知り共有できたことが分かる。また、他者の良さについては、より理解が深まったことも分かる。

表5 振り返り活動について

自分のがんばりがわかった	14人
人にがんばりを知ってもらいたい	12人
できたことを発表できてよかった	8人
友達のがんばりがわかった	14人
友達の良さがよりわかった	10人
人の発表が聞けてよかった	16人
次もがんばろうと思った	19人

(2) i-check 調査結果より

前述した活動後の感想から、学級会で決まったことを計画し、実践する活動は、児童にとって他者理解や集団の絆を深められると考えられるのであるが、i-check 調査においても、同様の深まり（肯定値の高まり）が見られる。ここでは、相互理解の深まりに関わる項目についての結果を用いる。

「他者からの評価」については、6月の調査では肯定値は58.7であったが、12月には64.9となり、高まりが見られる。6月には、学年平均を下回った値であったが、12月は学年を上回る値となった。高まりがあったとはいえ、学年全体でも全国平均値に届く値ではないため、互いを認め、励まし合える雰囲気作りなど、学年での取り組みを考えていく必要がある。「学級の絆」の項目においては、6月の肯定値は79であったが、12月は、83.5となっており、こちらも高まりがみられる。6月には、学年平均値や全国平均値よりも低くなっていたが、12月の値は、全国平均値より、高まったものとなっている。

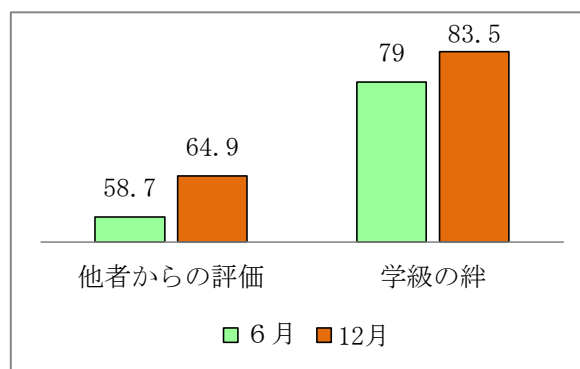


図20 肯定値の比較

以上のことから、学級会で決まったことを計画し実践する活動を行い、変化に気付く機会を設定することは、自他の変化（成長やよさ）に気付き、それを互いのよさとして認め合うことができる。学級の絆が深まったと互いが認識できたということは、この集団においての相互理解が深まったと考えられる。

X 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 相互理解の深まりに着目した理論研究を進めることで、特別活動の有効性がみえ、人間関係形成能力の育成を図る授業計画を立てることができた。
- (2) 国語での既習を実践する場として特別活動を設定し、教科との関連を図る取り組みを行ったことで、児童の行動実行の充実感と自己評価の高まりにつなげることができた。
- (3) 学級の絆の深まりに繋がる、教師の意図的な働きかけとして、自己理解と他者理解に着目した授業づくりや学級活動を行うことができた。
- (4) 児童の変容を見取るため、i-check 調査を活用したことで、特別活動の実践が児童の相互理解の深まりに有効であったことを客観的に示すことができた。

2 課題

- (1) 相互理解の深まりの手立てとなる、自他のよさの共有のさせ方が不十分であった。学校生活全体を通した、取り組み方法について検討したい。
- (2) 学級活動を、児童にとってより自主的・実践的なものにするための工夫に課題がある。学校行事等を踏まえ、年間を見通した授業づくりに努める。

〈主な参考文献・引用文献〉

- ・小学校学習指導要領解説 平成 28 年 3 月 『特別活動編』 文部科学省
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 平成 28 年 9 月
『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』 文溪堂
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 平成 27 年 10 月
『評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校特別活動』 教育出版
- ・無藤隆 2016 『教育研究 3』 初等教育研究会
- ・原田恵理子 2016 『教育心理学～言語力からみた学び～』 培風館
- ・桐山雅子 2016 『児童心理 11』 金子書房
- ・杉田洋 2015 『特別活動の教育技術』 小学館
- ・久我直人 2015 『教育再生のシナリオの理論と実践』 現代図書
- ・杉田洋 2014 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化
- ・伊藤忠弘，平林秀美 1998 『子どもの社会的発達』 東京大学出版会